



長谷寺かわら版

百日紅

84号

2012 (平成24) 年
11月1日

四国遍路つれづれ

(前篇)



秋の遍路のふつか目の朝は、雨に恵まれました。
台風17号が近づいていました。

夏の施餓鬼会の経木供養を廃止したこともあって、一昨年で十一年続いた夏の高野山詣でに、ひとまず区切りをつけました。これに

春と秋の年に二度。都合四年くらいかけて、結願の高野山詣でまで終えてしま

う予定です。再来年、二〇一四年に結願すると、翌二〇一五年は、高野山の「開創二二〇〇年」という、文字通り世紀の大イベントが控えています。

その遍路の旅も、この秋で四度目。早いもので、もう半分を折り返し、伊予に入り

☆「お四国」と「お遍路」ところで、「お四国」を始めたとき書きましたが、四国に「お」が付くと、四

八十八ヶ所霊場、あるいはその巡拝行為のことを指します。巡拝行為はまた「遍路に行く」とか「遍路をする」という言い方もします。

また「遍路」といった場合、人間自体を指す場合もあります。丁寧な「お遍路さん」といえば、これは決定的に人間のことで

人間を指す場合でも、「お遍路さん」に加え、「お四国さん」とか、ときに「へんど」などという、ちよつと耳慣れない言葉が聞こえてきたりすることもあります。

このあたりのことは、四国の人間にとっては、言わずもがなのことですが。

ただ、「遍路」という言葉は本来「辺路」、「海辺の道」海岸線ぞいの道といった程度の意味だったのでないかといわれています。四国の海岸沿いの道を歩いて修行するのが遍路だった

わけです。

☆遍路との出会い

私はもともと四国の人間ではありませんから、初めて「遍路」なるものに出会ったのは、書物の中で

高校時代に図書館で借りて読んだ、素九鬼子の『旅の重さ』。家出をした少女が、四国遍路の旅で、様々な体験を重ね、大人になつていく物語です。高橋洋子の主演で映画にもなりました。

その映画で使われた歌が、吉田拓郎の「きょうまでしてあしたから」。ぼくらの世代にはひどく懐かしい曲です。

その映画を見ての印象は、四国はどこにでも遍路が歩いているらしい、というものでした。それほど四国と遍路について無知でした。

しかし、四国を知らない人の中には、私と同じような印象を持っている人が、

実は少なくありません。

四国の寺にいうと、四国霊場の寺だと勘違いされることが多いです。札所(霊場寺院のことです)の寺なんて、数ある寺のうちの

ごくごく一部だと話すと、そんなもんかと言われる。札所の寺なんてごく一部

なのだから、四国だからといって、どこでも遍路の姿が見られるはずもないのですが、鳴門で暮らしてしばらくは、ここがあの遍路の地なのだと意識することさえありませんでした。当初

いだいていた印象は、やはり幻想に過ぎず、実際に遍路を見かけることなど、めったにありませんでした。

しかし四国ではどこにもも遍路がいるらしいという当初の印象は、あながち荒唐無稽な幻想だけではないらしいことは、次号で触れることになります。

☆ 遍路の見えない四国

ぼくが鳴門で暮らし始めた一九九〇年代初頭は、まだ今ほど「歩き遍路」のない時代でした。遍路はいたけれど、ほとんどが交通機関を利用していたわけで、だからあの頃は遍路には札所でしか会えなかったのでしょう。

寺からで、そこまでは乗り物を使うようです。ご承知のように長谷寺は、撫養の港と一番霊場を結ぶ撫養街道沿いにありますが、これでは彼らの姿を見ることができないわけです。

でも交通機関の発達していなかつた時代は、当然のことながら今と違って歩いて歩きです。スタート地点の一番札所にも、歩いて行くわけですから、長谷寺の傍ら^{かたわ}を行き来した遍路たちも少なからずいたことでしょう。実際、家人の幼い頃は、よく遍路を目にしたようです。

☆ 過去帳の中の遍路たち

ところで、うちの過去帳には、都合六〇人の遍路の記録があります。最も古いもので文化五年(一八〇八)、

それにいまは「歩き遍路」といっても、多くの場合、歩き始めるのは一番の霊山

先住たちが、長谷寺の近辺で亡くなった遍路たちに戒名を付け、引導を渡し、懇ろに葬ったことが分かります。

それは、遍路といつても、一番から順に打って行くとは限りません。うちの過去帳の最古の遍路は、備後(現在の広島県東部)の人です。

しかし、先にも書いたように長谷寺は、一番札所に向かう撫養街道沿いにはありませんが、いわゆる遍路道からははずれています。例えば、上方あたりからやってきた遍路なら、舟で海を渡り、岡崎あたりに上陸し、

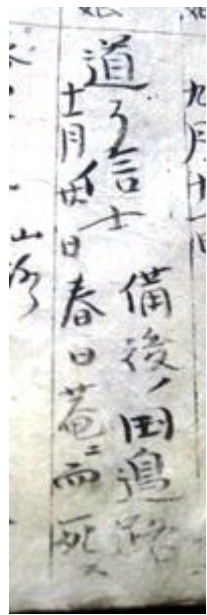
海を渡って伊予か讃岐から打ち始めたとしたら、長谷寺周辺を歩くことは、まずあり得ません。遍路が四国の人の場合でも、同じことがいえません。スタート地点は彼の住む土地です。

☆ 駅路寺

江戸時代の過去帳を調べて、再びこの街道を通って、帰ったかもしれません。けれど、そういう場合でなくことなどないはずです。いわば長谷寺の傍らを通るだけでは四四例。これを見

したある報告によると、県南の阿南周辺の十五か寺で、計一五六例の客死遍路の記録があるといえます。このうち、遍路道沿いの五か寺

ではなぜ、札所からも遍路道からも距離のある長谷寺周辺に、遍路たちがいたのでしょうか。考えられる理由のひとつが、長谷寺が駅路寺だったということ。駅路寺は、旅人の便宜をはかる目的で初代藩主蜂須賀家政が制定したといわれる、阿波国独特の制度です。



長谷寺過去帳にある最古の遍路の記録「道了信士 十一月廿春日備後ノ国邊路死ス」の文字が使用されている戒名が使われている場合が多いです。

しかし、駅路寺が、実際に機能したかどうかはかなり疑問視されていますし、

阿南の梅谷寺ばいこくじは同じ駅路寺ですが、この寺の過去帳の遍路はわずか一二例に過ぎません。

だとしたら、うちが駅路寺というだけでは、過去帳の遍路の多さは説明できません。

☆接待

これを解く鍵は、実は四国霊場に特有な「接待」という習慣にあります。

「接待」は、遍路たちに金銭や飲食物などを振る舞うことで、振る舞われる物品そのものを指すこともありまます。「お接待」と丁寧に呼ぶことが多いです。四国では、遍路に接待をすることが功德くどくを積むと信じられています。

ではなぜ遍路に接待をすることが、功德になるのでしょうか。

接待自体は「施ほどこし」ですから、いわば「布施」です。

布施は布施波羅密ふせはらみつという、

仏教の修行のひとつという話は、この紙面でもしたことがありますがね。誰かに布施をすることはそれだけで

功德になります。相手が修行者なら、その功德も大きいはずです。そして遍路たちは、とりもなおさず修行者です。

加えて、かの弘法大師信仰があります。

四国が、平安時代頃から僧侶たちの修行の場であったのは、たしかなことのようにです。しかし今のようない形の四国霊場が整備されたのは、かなり時代が下って、江戸時代になってからのことといわれています。それが、弘法大師と結びつけられて語られるようになったのも、同じ頃のことらしいです。

四国霊場は、大師の修行の地だったといわれ始め、

大師がひらいた霊場であるともされました。さらには、いまも大師が歩いているという信仰まで生まれまし

た。

遍路のつく杖は、金剛杖と呼ばれ、大師の身代わりともいわれ、遍路は大師とともに歩いていると考えられました。さらには、遍路

は弘法大師自身であるということにもなりました。ちなみに、遍路の杖が「金剛杖」と呼ばれるのは、「遍照金剛じょうこんじょう」が空海の別名だからです。

こうして、遍路への接待が、弘法大師に対する接待に他ならないと大幅にランクアップされたことも、接待が功德であるという信仰の推進力になったことでしょう。

☆接待講

ただここで押さえておきたいのは、いまの私たちが



春の遍路のおり、日和佐の薬王寺で出会った、紀州接待講。

イメージする接待と当時の接待は、根本的にそのあり方が異なっていたのではな

いかということ。いま遍路たちに対して行われている接待の多くは、特別の接待所を設けて、そこで茶菓などをサービスする

というものです。この春の遍路行でお参りした二十三番薬王寺の門前でたまたま、「紀州接待講」の接待を受けました。接待されたのは手拭いと菓子。

春の彼岸の頃から一週間ほどだけ開設されている接待所らしいです。

「お帰りにはお接待をお受け下さい」と、帰りにわざわざテントの前を通らされ、接待を、「強要された」とま

では言いませんが、受けることを求められました。もちろん、みなさんありがた

お受けしましたが。たまたまその日の夕方のテレビのニュースで、うちの仲間が接待を受けるシーンが放映されたらしいという情報が入り、バスの車内が湧きました。

どうやらこの季節の和歌山からの接待は、四国の春を告げる風物詩になってい

るようです。

江戸時代から続くというこの紀州接待講は、高野山のふもと、かつらぎ町を中心とした人たちによるもので、いまも町内から浄財を募って続けられているらしいです。

☆「花へんろ」

しかし接待講のような、黙っていてもただける接待は、むしろ特殊なもので、逆に遍路たちからの働きかけで初めて成立するのが、接待という行為の主流だったようです。

私がまだ四国を知らなかった時代の、遍路に関する知識のいまひとつの情報源が、NHKで放送された早坂暁さんの「花へんろ」というドラマです。

舞台になったのは早坂さんの郷里の愛媛県。風早という街こそ架空ですが、彼の自伝的な作品です。

ドラマの中で、遍路道に

面した富屋勸商場（いまでいえば、スーパーマーケットです）には、遍路が立ち寄り、店の前で鈴を鳴らし読経して接待を乞います。店の者たちは、米や野菜、草履などを用意して懇ろに接待をしますが、多忙な時など、「お通り下さい（うち

の前は通り過ぎて下さい）」と、遠回しな言い方で接待を断る場面も頻繁に出てきます。

現在の接待所のように、「接待しますから、どうぞお立ち寄り下さい」といったものではありません。いずれにしても、幼い早坂の体験そのものなのでしょう。

☆接待の作法

繰り返すように、四国は古くから仏教の修行の場でした。遍路という行為自体が修行です。そして仏教の修行には托鉢がつきもので

す。というより、托鉢しながら遍路をすることこそが

正しい修行であるともいえます。豊かな人が散財しながら歩くのでは、修行になどなりません。

托鉢とは接待を求める行為です。食べものを恵んで下さいと相手に求めるわけ

です。しかも接待を求めることは相手に布施という修行の機会を与える行為です。つまり托鉢は、求める者、与える者双方にとつての修行

にはほかならないわけです。遍路たちが民家の軒先に立って、鈴を鳴らし、読経などをして、食べものを求める「托鉢」という行為が

相互の修行は、こういうプロセスを経て完成するわけ

です。このように、遍路から求められてるのが接待の本来的なあり方ならば、今の

ように求めもせずに接待されるのでは、与える側の修行にはなりません。

春にお接待をいただいた時も、せめてお札に般若心経の一卷でもお唱えすればよかったです、後悔は常に先

には立たないわけです。（つづく）



◆カンパと切手

届いたカンパと切手の紹介が滞っていました。今回まとめていたします。なお使用済み切手は、関係機関に送る、いわば仲介

ここでの紹介は控えることにしました。ご了承ください。

カンパ
斎藤常雄さん（立岩）・谷口宏仁さん（榎木）・濱武捷さん（南浜）・福井幹代さん（徳島市）・米本茂雄さん（木津）

切手
岩根泉さん（徳島市）・瓜生方代さん（斑鳩町）・四宮智子さん（つくば市）・高島育子さん（高島）・玉城玲子さん（京都市）・吉田政江さん（鳴門）・匿名さん。

〒772-0004
鳴門市撫養町木津 1037-1
電話 088-686-2450
ファクス 088-686-2130
E-Mail
cho_kuma@mwb.biglobe.ne.jp
URL
http://www.chokokuji.jp/